

Laval Virtual 2005

師井聡子

東京電機大学

“Sound Flakes: 音だま”を、Laval Virtual 2005 に出展した。同作品は、昨年の京都大会での展示に対して、本学会学術奨励賞を頂き、学会誌 Vol.10, No.1(3月25日発行)にも既に紹介の機会を頂いた作品である。

私は、作家として創作を行う視点において、自分の創作活動と社会との直接的な接点にとっても興味がある。

そこで、Laval Virtual の展示と市民の関係が、その関わりにおいてユニークな一例になっていることを報告したい。

実は、私自身は三年前にも参加した経験があり、少し懐かしい気持ちで Laval 市を訪れたのだが、当時との比較が私を感嘆させた。

その驚きとは、変わらずに美しい町並みとは対照的に、大きく変化した市民の反応の変化である。

Laval 市は、古城を中心として小さな家や商店が並び、最先端の科学や技術のイメージとはほど遠い雰囲気をもつ、小さく静かな町である。しかし、そこにいかにも異質なイベントが、年中行事として広く認知され、受容されていると感じた。

以前参加した第4回大会でも、今回同様一般開放日が設けられていたが、今回はまず、一般来場者の数に驚いた。親子連れも多く、会場内を歩くのも大変で部分的に通行制限もされるほどであった。

街頭での認知度も高く、洋品店では店主が、彼女が入場記念にもらったというボールペンをくれ、別の女



Laval Virtual 2005 一般開放日の展示風景

性店員も自分も行ったと話し始めた。レストランでも、「毎年のあのイベントなら領収書は必要か?」と聞かれた(公費の利用も多いのだろう)。一般向けの情報として数年前から取材に来ているというジャーナリストにも出会った。

三年前、街で片言の英語が通じず、アジア人の顔だけで子供が立ち止まるという様子とは大きく違う。

この変化の理由として、一般開放を土日に、かつ特別安価な入場料設定など、一般市民を誘引する具体策が講じられていること、さらに、盛況の様子がテレビや新聞で連日報じられるなどマスコミとうまく連携した情報提供がなされていること、そして少なからず近隣への経済効果をももたらしていること、などが挙げられると思う。

結果として、Laval Virtual は、市民にとってのお祭りとして、研究者にとっては社会のダイレクトな反応に触れる機会として、そして「学会」という枠を乗り越えた全ての人にとって、まだ私たちが未体験の新しい時代について会話する場としての存在意義を確実にしつつある。

このイベントは学術的展示の多くが助成を受けて出展しており、私の参加もそのおかげで成立したものである。各方面からの学会関係者の努力と助力と社会が交流する形の一つのよい例として、参考になる点が多くあるように思えた。



Laval 市の町並み